

# TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌



## 特集 座談会「新しい時代の教科書本文を模索する」

### 巻頭エッセイ

小さなステップが大きな夢を実現する ..... 大平貴之 01

### 特集

#### 座談会

..... 伊地知可奈・根岸雅史・室井美稚子・山本崇雄・高橋貞雄 02

### 連載

英語教師のための基礎講座 これからの10年間に備えよ ..... 斎藤栄二 12

評価クリニック リーディング・テスト作成の心得 ..... 根岸雅史 14

授業レポート 「書くこと」の指導[2] — 他技能へつながるwriting — ..... 山下敦子 16

小学校英語 Just Now 「目標」に正対した授業づくりとは ..... 渋谷 徹 19

単語の文化的意味 70 sugar ..... 森住 衛 21

#### 英語教師のリソース

絵本で読み聞かせ — 小・中学校の英語学習をつなごう — ..... 山本玲子 23

AROUND THE WORLD インドのことばをめぐるあれこれ[2] ..... 水野善文 表紙裏

表紙写真について Jambo! 素敵な笑顔をありがとう! ..... 紺野正典 表紙裏

Vol.12

SUMMER 2008  
SANSEIDO

## 「ベナレスって、どこ？」

遠藤周作、最晩年の『深い河(ディーブ・リバー)』を読んで、作家の直感の凄さに感動した覚えがある。我々インド研究者がこつこつと文献を渉猟して初めて到達するような発見に感性で迫っているからであるが、その分析はともかく、ここでは、作品の重要な舞台となった街の名称をめぐって、インドのことはを観察してみよう。

インド最大の聖地であり、インドで最も「インド的」とも評されるその街は、筆者などはベナレスと呼び慣らわしてきた世代なのだが、遠藤氏はさすがに公的な正式名称「ヴァーラーナシ」を採用している。ローマ字で翻字すればVārāṇasī(ṅは反舌音)で、ヒンディー語の語頭のv音はw音と容易に交代することから実際には「ワラーナシー」と発音されることが多い。

一方のベナレス。実はこれ英語綴り Benares のローマ字読みにはかならない。お手元の英語の辞書で発音記号をご確認いただければ、むしろ「バナラス」に近く、決してベナレスとは発音されないことがわかるだろう。彼らが日常的に通称として使用する地名は Banāras なのだ。そう、だから、インドへ行って「ベナレスはどこ？」と尋ねても「ベナレスって、どこ？」と問い返されてしまうのが落ちだ。

では、Vārāṇasī と Banāras の2者が存在する事情はどこにあるのか。前者の用例は、2・3世紀頃に成立した原始仏典にも高級絹布の産地として見られるほど

古い。雅語であるサンスクリット語とは異なり、民衆の話しことばに近く地域的にも時代的にもはなはだ多様な言語群をプラークリット諸語と呼ぶが、その1つパーリ語で記された仏典では語頭がb音でBarāṇasīとある。11世紀頃のインドのある文法学者によれば、幾つかのプラークリット語ではサンスクリット語のVārāṇasīがVāṇarasīになると記述されている。つまりr音とṅ音との間に音位転換(metathesis)が起きたというのだ。それが更なる変容をこうむりながら今日の通称Banārasに至ったのだ。一方が固定化された伝統的言語による呼称だったのに対し、他方は自然に変化する日常語による呼称だったわけだ。1つの社会にも体系の異なる複数の言語が重層的に存在するインドの特殊な言語事情を物語る事例と言えよう。

高校生必携の世界地図帳には「ヴァラナシ(ベナレス)」とあって、音引きを3カ所とも省くのはいただけないが、両名併記の背後には長い歴史が潜んでいたことになる。ほかに3つの大都市もコルカタ(カルカッタ)、ムンバイ(ボンベイ)、チェンナイ(マドラス)と併記され、いずれも、「現地での伝統的な名称+(英語由来の名称\*)」であることを示している。伝統名への回帰には政治的な思惑もからんでいて、ことばと政治の問題として重要だが、歴史の詳細を知るには順次ベンガル語、マラーティー語、タミル語の知識が必要になる。

(※マドラスはポルトガル語由来)

表紙写真  
について

## Jambo! 素敵な笑顔をありがとう!

紺野正典 Konno Masanori (東京都足立区立第六中学校)

NEW CROWNの3年生に題材として扱われている国、タンザニアのザンジバル島を旅した。日本人にはあまりなじみのない国であるが、ここは昔から文明の十字路であるだけでなく、青い海と青い空、それに珊瑚礁からなる名高いリゾート地でもある。この島で私はたくさんの現地の人々と出会い、そのどれもがかけがいのない宝物となった。

世界遺産になっているストーンタウンを散策していると、どこからともなく気軽に“Jambo!”と声がかか

る。偶然出会ったムサ(左写真)は、島でも有名なティンガティンガ画家であった。彼にはお弟子さんが5人もいる。私は、彼が描いたティンガティンガの絵を見て息を飲んだ。サバンナに住む野生の動物や鳥は、独特の画風で大胆にデフォルメされて描かれ、アフリカの大地の息吹を謳歌しているように思えた。

私はこの旅に、日本の生徒から預かったたくさんの文房具とメッセージカードを持って来ていた。ムサに頼んで紹介してもらったキジムカジ

小学校(写真右)を訪れると、そこでは数え切れないほどの子どもたちが、遠い国からやって来た私を出迎えてくれた。教室に入ってあいさつをしたあと、子どもたち一人ひとりに片言のスワヒリ語で話しかけ、文房具を渡していった。私がペンを渡したときの、あの輝く笑顔は一体どこから来るのだろうか。デジタルカメラで撮ったばかりの写真を見せたときの、あのつぶらな瞳と笑顔。重い荷物をここまで運んで来て本当によかったと思えた瞬間だった。





# 小さなステップが 大きな夢を実現する

大平貴之 Ohira Takayuki

私がプラネタリウム作りを始めたのは、小学校4年生くらいだったでしょうか。単純な好奇心で、夜光塗料を紙に塗って壁に貼ってみたら夜空のように見えるのではないかと、という発想が原動力でした。実際にやってみて、想像以上にきれいな星空が現れたのを見て感激し、製作にのめり込むようになりました。しかし、夜光塗料の星は壁に固定されていて動くことはありません。動く星空を作りたくなり、本の付録をもとにピンホール式プラネタリウムを作り始めた頃は、すでにプラネタリウムのとりこになっていたと思います。ほかにも写真の焼付けや天体望遠鏡の製作、天体観測や撮影、鉱物採集、そしてロケットの製作や組み立てにいたるまで、いろいろな分野に興味を持ち、自ら取り組んできましたが、高校時代ぐらいから次第にプラネタリウムに収斂しゅうれんするようになっていきました。

数ある興味の対象の中で、プラネタリウムが私にとって特別だった理由のひとつは、プラネタリウムが幅広い分野の知識や技術の集大成で成り立つものだったからです。いわば、ほかの分野で学んだり体験したことを活かせるのです。たとえば写真の焼付けで学んだ知識が、星の原板を作る技術に結びつき、ロケットの製作で学んだ技術が、プラネタリウムの小型軽量化の技術につながりました。そして、理由のもうひとつは、プラネタリウムが人に見てもらい、感動を与えられるものだったからだだと思います。自分で作り上げた星空が、多くの人を包み込み、その空間で同時に感動を共有できる。高校の学園祭では、初めて教室に小型のドームを組み立て、一般のお客さんに向けて公開し、自らマイクをもって解説にも挑戦しました。それが自ら作り上げたものを、自ら動かして表現するという喜びの原点になりました。

こうした魅力にとりつかれ、高校時代にはピンホール式の1号機、2号機を完成、大学では4年間かけてアマチュア初のレンズ式プラネタリウム「アストロライナー」を完成させました。これらは大学卒業後、大幅に小型化し恒星数を一気に100万個以上に引き上げた「メガスター」につながりました。

「メガスター」を見た人によく聞かれるのが、「よくここまであきらめないで作り上げましたね。あきらめない秘訣は？」ということです。そのとき私は「あきらめる必要のないような、実現可能な課題に取り組んだだけです」と答えます。確かに何も経験のないところから「メガスター」を作り上げようと思ったら、途方もないことのように思えるかもしれませんが、子どもの頃から自分の手の届く範囲で目標を設定し、それが実現すると、そこまで学んだ知識と経験を活かしてさらに次のステップに進む、そういう小刻みなステップをのぼり続けてきただけなのです。私は「どんな夢も叶う」などとは思いません。自分は何が得意なのか？ 何が好きなのか？ おぼろげにでも自分の適性を見極め、自分で定めた目標に向けて、小さなステップでも着実にのぼり続けることが、夢を実現する秘訣ではないかなと思います。



メガスターII

## おおひら たかゆき

1970年神奈川県生まれ。(有)大平技研代表取締役、東京大学特任教員、和歌山大学客員准教授。1998年に個人で完成させた「メガスター」では従来の約100倍の恒星を投影することに成功した。400万個以上の星を投影する「メガスターII」は、『世界で最も先進的なプラネタリウム』としてギネスワールドレコードに登録されている。

## 特集：座談会

伊地知可奈	根岸雅史	室井美稚子	山本崇雄	高橋貞雄《司会》
 IJICHI KANA (東京都練馬区立八坂中学校)	 NEGISHI MASASHI (東京外国語大学)	 MUROI MICHIKO (清泉女学院大学)	 YAMAMOTO TAKAO (東京都立両国高等学校附属中学校)	 TAKAHASHI SADAO (玉川大学)

## 新しい時代の教科書本文を模索する

**高橋** ご存じのように、新しい学習指導要領の内容がほぼ明らかになってきており、英語が各学年で週4時間体制になることや、「基礎と発展」「ことばと体験」「習得・活用・探求」などのキーワードが各方面で取りあげられています。この座談会では、新学習指導要領の内容も考慮に入れながら、テーマである「教科書本文」について考察を深めること

## 本文をどう使っているか

**高橋** まずはじめに、授業の中で本文がどのように扱われているのか、その現状について、実際に中学校の教壇に立つ先生方からお伺いします。

**伊地知** 現在中学3年生を担当しているので、使用されている文法や内容はある程度高度なものになっています。私は通常、文法を扱う部分と本文を扱う部分を切り離して授業を組み立てています。最初に文法の導入をして、その文法を理解した上で、今度はその知識を活用して本文の内容が理解できるかどうかという段階に入ります。

ができればと思います。

考えてみれば、日本の英語教育における「教科書本文」というものは、あまりに当たり前の存在として常にそこにあったので、あまり問題意識を持ってその存在自体を問い直すようなことは、これまでなされなかったのではないのでしょうか。そのため、それを授業の中にどう取り込み、どのように使うのかとい

本文の内容理解をする上で、まず必ず行うことは、オーラル・イントロダクションです。そのあとに生徒たちに様々なタスクを課し、内容を深く理解させます。そして、音読を繰り返し行います。最終的に、本文をモデルとして題材内容にからめた英作文をさせ、そこで習ったばかりの文法を使った自己表現活動に広げるような活動をすることもあります。そのほかにも、既習の本文を使って帯活動としてラスト・センテンス・ディクテーションをしたり、授業外の時間を使って、音読のリーディング・

う点に関しては、あまり明確な指針がなく、ある意味では授業者任せになっていたように思います。今回は新学習指導要領が発表されるタイミングでもあるので、改めて「教科書本文」というものについて問い直し、英語教育にとって「本文とは何か」という根本的な問いを柱として、様々なご意見を伺いたいと思います。

マラソンをしたりと、教科書の本文は手を替え品を替え、繰り返し活用しています。

**高橋** 本文に入るときに、導入で工夫していることなどはありますか。

**伊地知** オーラル・イントロダクションで本文を導入する際には、題材に関する資料を集めたり、関連するビデオを用意したりするなど、生徒が題材内容に入りやすいように工夫しています。どうしても資料が集まらなかったり、納得いくピクチャー・カードが手元になかったりするときには自分でオーラル・イン

トロダクションに使用する絵を描くこともしばしばありますね。

**山本** 私の場合、教科書本文を使って、軸になる活動を3つ設定しています。1つはオーラル・イントロダクション、もう1つは音読指導、最後はオーラル・プレゼンテーションと呼んでいる、本文内容のリテリング活動です。

まずオーラル・イントロダクションですが、これはほとんどの場合、生徒とのやり取りを含んだインタラクションの形になります。次に音読の指導ですが、正確な発音だけでなく、場面に応じた音読も意識させます。目標を定め、それを音読テストで評価します。最後のオーラル・プレゼンテーションですが、ちょうど教師がオーラル・イントロダクションをするように、生徒がクラスの前に立ち、ピクチャー・カードを使用しながら本文内容について発表する活動です。このとき本文内容に加えて、自分の考えを表現したり聞き手に質問を投げかけたりする部分を入れることで、表現力だけでなく、本文の内容理解がきちんと行われているかの確認もできます。

このほかの細かい活動としては、語彙や文法の小テスト、ディクテーションなどもやっていますし、家庭での音読などもさせており、これが最終的には暗唱するところまでつながっています。

**高橋** 内容を理解して終わりということではなく、本文についての最終的な出口となるのは、オー

ラル・プレゼンテーションをしたり、暗唱をしたりという発表活動になるということですね。

**山本** その通りです。逆説的ですが、「読めるけれども意味がわからない」ということもあり得ます。音読ができていたり、日本語に訳すことができているとしても、本当の意味が理解できていないということです。オーラル・プレゼンテーションで人に説明するとなると、本当の意味が理解できていることが必須となりますので、ごまかしはききません。一目瞭然です。

**高橋** 本当の意味が理解できるということが非常に重要になってくると思いますが、そのための手だてとしてどんな工夫をされていますか。

**山本** 文字以外の情報をしっかりと使うことでしょうか。教科書本文の優れている点は、場面がしっかりしていることだと思います。場面を表すイラストや映像資料などをうまく使って、意味を取る際の手助けとしています。

ただし、最初からすべてを理解しなければいけないとは思っていません。はじめにすべてを与えてしまうのではなく、はっきりしない部分を残しておいてもいいのだと思っています。本文に何度も関わりながら、語彙や文法が身についたり、音声の指導を受けたりする過程で、同時進行で意味の理解が深まっていくような形でいいのではないのでしょうか。

**高橋** 本文にかける時間はどのくらいですか。

**山本** だいたい授業の3分の2くらいは使っていると思います。

**高橋** 室井先生は中学校や高等学校で教壇に立った経験をお持ちですが。

**室井** 私が中学校の教壇に立っていた頃は、今のような「本文のイントロダクション」などはあまり意識していなかったと思います。その代わりに、週5時間体制のおかげもあり、題材に関連していかに話を膨らませ、内容のおもしろさをいかに伝えるかに一生懸命であったように思います。当時 *NEW CROWN* を使っていたのですが、当時からアリスのシリーズが載っていて、作者や作品についての話をしたり、ハンプティ・ダンプティにちなんでゆで卵に絵を描いてコンテストをしたり、ゆとりがありました。本文がすべてであり、本文のおもしろさを何とかして伝えることが教師の使命だと思っていましたし、それが楽しかったのを覚えています。ただし、当時は英語によるインプットなどは考えていなかったもので、すべて日本語で話していたのは今思えばもったいなかったかもしれません。

今では、音読の大切さを実感しながら教えています。音読のモデルを示すときには、生徒の知りたいという気持ちを引き出すために、内容に感心して「ほー」「へえ」などと言ってみせるだけでも違いが出ると思います。また、生徒にとっては不慣れな言

IJICHI  
KANANEGISHI  
MASASHIMURROI  
MICHIKOYAMAMOTO  
TAKAOTAKAHASHI  
SADAO

語である英語の音は、はじめはできるだけゆっくり読んで聞かせてあげないと、リピートするのが不安であり、英語らしい発音のまねをするのは気恥ずかしいものでしょう。ですから私は、はじめはゆっくりと、徐々に速く、3段階くらいのスピードとともに読むようにしています。

音読のテストも実施していますが、年に1度でもテストがあると、普段から音読をおろそ

## 本文にふさわしい英文とは

**高橋** 根岸先生は指導的な立場から中学校現場をご覧になっており、また教科書のづくり手としても本文に関するお考えをお持ちですので、その両面からお話いただけますでしょうか。

**根岸** 私は以前に勤務した県立高校と高等専門学校(高専)で、検定教科書を使って教えた経験があります。一方、高専の4年次と5年次は短大相当ということで、検定教科書ではなく、当時浸透し始めていたコミュニケーションティブ・アプローチの理論にもとづいた教材を使っていたのですが、本物の新聞やパンフ

かにしないという姿勢が生徒の中にできるようです。音読するときにはセンス・グループを意識させ、最終的には自分のことばを発するように音声が出せれば、読むことが話すことにつながっていくと思います。

**高橋** 本文はすべての中心であり、そこからいかに展開するかが、英語教育そのものであるというような観点があったと思います。先生方の話を伺って、い

わゆるリーディング・スキルをはじめとする英語のスキルという意識が出てきたのはいつ頃だったかと考えさせられました。今では、一方で本文の題材内容そのものの価値があり、一方で英語のスキルを高めることがあります。その両方に深く関わる本文ですが、その両者のつながりにこそ、本文の現代的な役割が見えてくるような気がします。

レットなどが掲載されていて、オーセンティックな読み物が豊富でした。それらと比較してみると、検定教科書に載っている本文というものは、いったい何なんだろうという思いを抱くようになりました。本文とは、教科書のためだけに誰かが書いた文章であり、改めて見ると、教科書以外の現実の世界にはない種類の文章です。これはとても、何というか、おもしろくて不思議な存在だなと。日本の英語教育には欠かせない存在なのですが、読み手は学習者でしかなく、学習者のために、英語を勉強するために書かれた文章というのは、実はかなり特殊なのではないかと。

もうひとつは、初級者向けのケンブリッジ英検の作成に携わっていたときに感じたことですが、初級であるにもかかわらず、新聞やチケットなどのオーセンティックな素材を使うように指示されるのです。いわゆる教科書本文のようなものは出て

こないのですね。それと時期を同じくして、東京都中学校英語教育研究会(都中英研)が作成しているコミュニケーションテストにも携わりました。会議でリーディングの問題を持ち寄るのですが、リーディングの素材なのに会話文が多いんですね。確かに教科書の本文には会話文が多いので、先生方にはあまり違和感がなかったようですが、そもそもの私の疑問は「会話文って、読むものだろうか」ということなんです。これについては都中英研でも議論し、それ以降は「読むべきものを読ませる」ようになりました。会話文を日常的に読むことはあまりありませんので、リーディングの素材には適さないという考え方です。

このようなコミュニケーションティブ・テストの考え方に立って見たときに、会話文とはいったい何者なのでしょう。授業ではどのように使われているのでしょうか。読解の対象と

### PROFILE



根岸雅史

東京外国語大学教授。専門は英語教育学・言語テスト。現在、日本語テスト学会・英語運用能力評価協会の理事。著書に「コミュニケーションティブ・テストへの挑戦」(三省堂)、「テストの作り方」(研究社出版)ほか。



IJICHI  
KANA



NEGISHI  
MASASHI



MUROI  
MICHIKO



YAMAMOTO  
TAKAO



TAKAHASHI  
SADAO

PROFILE



山本崇雄

都立両国高等学校附属中学校教諭。英語劇を頂点としたトップダウンの英語授業を目指す。著書に「中学生の楽しい英語劇」(秀文館・共著)、「都立中高一貫教育校一期生の進む道」[英語教育4月号(2007)](大修館書店)ほか。

することが妥当なのでしょう。様々な疑問が浮かんできません。これらの疑問は現在でも私の頭の中にあります。

このような本文の背景には、本文を覚えれば英語力が伸びるというようなロジックがあるのではないかと思うのですが、果たしてそうなのでしょうか。確かにそれで伸びる力があることは事実でしょう。しかしモデル文の暗唱が、自由な発話をする能力につながるのでしょうか。日本の英語教育では、「覚える」と「使う」を比べたときに、「覚える」部分に重きを置いて、「使う」練習は学習者に任されているように感じることがあります。本文を覚えることも大切でしょうが、それだけでは英語を「使う」という視点が弱くなるのではないかと思います。

**高橋** 本文とはいったい何者なのか、特に会話文の本文はどういった存在なのか、という根源的な問いですね。会話文の教科書本文が増えていますが、これは音読したり暗唱したりすべきものなのか。あるいは、本文という存在は本当に必要不可欠なのだろうか。そういった点が気になります。

本文を軸にした授業の組み立て

**高橋** 次に、授業の流れの中で本文をいつ扱うのかということをお聞きします。先ほど授業時間の3分の2程度は本文がらみの活動に費やしているという山本先生のお話がありました、他の先生方はいかがでしょうか。

**室井** 会話文に関しては、高校の場合、オーラル・コミュニケーションの教科書と英語Ⅰや英語Ⅱの教科書では事情がまったく違います。後者には会話文がほとんどありません。そのような教科書を使ってみて思ったのですが、会話文には授業の中でそれなりの役割があるのです。本文をペアで音読させやすいので、場面設定にバリエーションを与えたりなどしながら教科書を楽しくペアワークに発展させることができます。もちろん、会話文があるからコミュニケーションだと思えるのは安直すぎるとは思います。

**山本** 私は先ほど申しましたように、オーラル・プレゼンテーション活動を軸のひとつとしていますが、会話文の内容をプレゼンテーションで伝えるとなると、やはりそのまま暗唱というわけにはいかないので、当然内容を言い換える、いわゆるリプロダクションをすることになります。会話文の情報をまとめなおしてプレゼンテーションすることです。また、その中に自己表現も入れるように指導していますので、生徒が必要とすれば、中学1年生でも現

どのような活動から入って、どのような順を追って授業を組み立てていくのでしょうか。

**伊地知** 私も3分の2くらいの時間は使っていると思います。会話文か読み物かによって扱いは変えていますが、まずはオー

在完了形を使わせるようなこともあります。そのような活動を積み重ねていくうちに、He said ..., I think ..., I agree with him. などの表現が自分のことばとして使えるようになり、やがてスピーチやディスカッション、ディベートなどをする力になっていくと思います。簡単に身につくものではありませんが、3年間かけて型を教えていけば、自己表現力が鍛えられます。教科書を読むことだけで終わらせず、読んだ先に何があるのかということを示してあげることが必要だと思います。

**高橋** 教科書本文をレセプティブな扱いだけで終わらせるのではなく、そのあとに行う自己表現活動のための素材と位置づけるということがよくわかりました。

ラル・イントロダクションから入って、内容に入っていくための様々な手がかりを与えます。内容理解が済んだあとは、私も自己表現まで持っていくようにしています。また、本文に直結してはいませんが、チャット活

## PROFILE



伊地知可奈

東京都練馬区立八坂中学校教諭。東京都中学校英語教育研究会調査部員として都中英研コミュニケーションテスト作成に携わっている。平成16年度東京都教育研究員。平成18年度東京教師道場部員。練馬区学力調査委員。

動もさせています。この活動は、だいたい1年生の後半くらいから始まります。この中で、本文に出てきた既習の会話表現や文法などを自己表現につなげられたのではないかと思います。

本文には、自己表現のための素材を提供するという役割もありますが、私は内容面も重視していると強く感じます。近年、戦争や人権について子どもたちに知らせたり考えさせたりする機会は、少なくなってきたのではないかと感じています。そのようなことを英語の教科書を通して学ぶことができるのは、とても素晴らしいことだと思います。教科書から英語だけではなく、国際理解を踏まえた歴史や文化を学習させることも本文の大切な役割ではないかと思っています。

**高橋** 本文には、言語材料などの素材提供ということ以外に、

## 本文の役割とは

**根岸** 非常に興味深いのは、本文の役割に、大きく分けて「内容」に属する部分と「スキル」に属する部分の2つがあるとい

子どもたちを学びに向かわせるという役割もあるというお話ですね。

山本先生も伊地知先生も本文を重視して、それ相応の時間を割いているということですが、中には言語の運用を重視した活動ばかり行って、教科書はほとんど扱わないという先生もいらっしゃるのではないのでしょうか。

**伊地知** 私が初任の頃の話ですが、教科書を一切使わずに、自分のプリントしか使わないという先生もいらっしゃいました。当時はそういうやり方もあるのだと思っていました。

**根岸** 最近でもそういった授業スタイルの先生はいらっしゃると思います。授業の終了間際に、5分くらいで本文をざっと流すというようなやり方ですね。生徒の立場に立ってみると、不安になるのではないかと思います。

**室井** そのような扱い方では、本文の内容を広げたり深めたりといった余裕は一切ないでしょうね。

**高橋** 室井先生の授業スタイルでは、どのくらいの時間を使って、どういう順序で本文に向かっていきますか。

**室井** 私は授業時間の5分の4くらいの時間を本文関係に使っていると思いますので、その意

う点ですね。本文は、内容やメッセージを伝えるためにあるのか、それとも言語材料を教えるためにあるのか。

味で教科書本文にとっても依拠していると言えるかもしれませんが。本文には、書いた人の願い、伝えたいことが詰まっていると思います。スキルとしての英語はもちろん大事で、それを軽視するつもりはありませんが、スキルとメッセージは車の両輪のようにどちらも大切だと思います。月日がたち、たとえ英語というものを忘れてしまったとしても、その人の中に残っている何かがあるということが、大事なのではないのでしょうか。

**高橋** 教育とは、知識を忘れたあとに残るもの、ということばを思い出しました。

本文を扱う前後には、どのような活動をしていますか。

**室井** 導入には、時事的な話題の中から本文の内容に関連したものを扱って、生徒の興味を高めるようにしています。そんな中から、生徒のクリティカルに考える力を伸ばしていければと思います。一方、先生方のお話を伺って、私の授業には出口の部分がないと反省しました。プレゼンテーションにつなげるなど、時間があれば取り組みたいところです。テストでは本文の内容に関連したことを書かせたりしていますが、そこで生徒の思いや個性が出るかと思っています。

海外のコースブックや検定試験などでは、そこに載っている読み物は「スキル」のためのものなので、文章は置き換え可能で



す。たとえば英字新聞の記事が載っているとして、同じようなスキルを扱えるのであれば、次の日の記事と置き換えたとしても何の支障もありません。ところが日本の教科書ではそうはいきません。「内容」こそが重視されるので、文章を置き換えてしまうことはできないのですね。

実はこのことが、日本におけるテストからいわゆる「総合問題」がなかなかなくなることに深く結びついているのではないかと思います。本文が置き換え可能であれば、テストの際には教科書本文とは別の文章を持ってきてスキルの試験を行えばいいわけです。しかし、置き換え可能でない場合には、別の話を持ってきてテストをつくるわけにはいかないのです。内容的な部分は、スキルのように本文から切り離して扱うことができないので、いわば本文と一体であり、不可分なのです。

このように本文の役割には2つの面があり、それによっていろいろ縛られているところがあるように思えます。

**室井** おっしゃる通りだと思います。私はその2つの役割が

あることこそが教科書の素晴らしさでもあると思います。TOEIC対策などで高度にプラクティカルなものを読ませることもあるのですが、そこには生徒の心に響いてくるような内容はありません。リーディング・スキルを伸ばすことは重要ですが、生徒の精神的な発達段階を考えると、無味乾燥なものを読むだけで勉強が終わってしまっただけは寂しいと思います。両方を求めつつプラクティカルな力を伸ばすことも可能だと思いますし、それが教科書の役割なのではないでしょうか。

**根岸** その点には賛成です。英語教育がそこまで引き受けべきかどうかという議論はあると思いますが、個人的にはスキルもメッセージも、どちらも重要であると思います。

ひとつ気になるのは、メッセージ性のようなものが全体にわたって必要なのか、いわゆる新出の文法事項を導入するよう際にもメッセージ性が必要なのかどうかという点です。たとえばThis is ～. を初めて導入する際に、内容的なメッセージを込めることが必要でしょうか。

**室井** そうなると、味の濃い食べ物みたいで、生徒にはしんどいかもしれませんね。そのような際には、文法事項を理解することにフォーカスして、わかりやすく料理してあげることが優先し、メッセージ性は抑えるような発想が必要なのかもしれません。

**高橋** 教科書本文の2つの役割が浮かび上がってきました。Skill-based Language Teachingの立場とContent-based Language Teachingの立場、それぞれが重視する部分であると思いますが、後半ではその両方を重視する立場から、本文に望むことを探していきたいと思います。

## PROFILE



室井美稚子

清泉女学院大学教授。専門は異文化間理解・英語教育学。中部地区英語教育学会所属。「わかる楽しい授業」を目指して、中学校・高校・高専に長年勤務。検定教科書およびアジアの教科書を研究中。「新しい英語の学び方・教え方」(ロングマン、共訳) [WHAT'S UP?] (桐原書店) ほか。

## リーディング・スキルを伸ばすには

**高橋** 4技能を考えたとき、本文は「読むこと」に最も関係が深いですね。しかし、読むことの「オーセンシティブ」ということが、これまであまり追求されてこなかったのではないのでしょうか。つまり、教科書本文の読みが、実生活で新聞や手紙

を読むということにどうつながっていくのかが、あまり見えてこなかった。たとえば「会話を読む」ということが、どう実生活につながるのかがわかりにくいのですね。

しかしこのことは、本文が複合的な役割を担ってきたという

ことでもあると思います。新学習指導要領でも、基礎的な知識・技能の習得ということが謳われていますが、教科書本文を使っただけに基礎的な知識・技能を身につけさせるかということも重要です。これは読むことに限らず、すべての技能における基

IJICHI  
KANANEGISHI  
MASASHIMURROI  
MICHIKOYAMAMOTO  
TAKAOTAKAHASHI  
SADAO

## PROFILE



高橋 真雄

玉川大学教授。専門は応用言語学・英語教育学。言語習得論、教授方法論、外国語教材論などに特に力を入れている。現在、大学英語教育学会（JACET）の理事としても活躍中。著書に『ロングマン応用言語学用語辞典』（南雲堂）、『外国語の教え方』（玉川大学出版部）ほか。

礎基本ということになります。

**伊地知** 4技能の力を培うには、教科書の本文はととても大切だと思っています。本文をきちんと読み砕いて、生徒自身がひとりで読めるようになり、声に出して読めるようになり、最終的には、その内容についての考えや本文の表現を用い、自己表現できるところにまでつなげていきたいと考えています。本文の役割は、読むことにとどまらず、聞くこと、書くことや話すことにまで広がっていくものだと思います。

**高橋** こうしてみると、いわゆる題材内容は別としても、教科書本文には様相の異なる2つの役割があるように思います。1つは、すべての技能の根本となるような基礎基本を身につけるための素材の提供。もう1つは、純粋に読む材料としての役割です。どちらかというと、後者の役割に関する意識が、これまでの中学校の教科書では希薄であったように思いますが、いかがでしょうか。あるまとまったパラグラフがあった

とき、どうやったらそれが読めるようになるのか、いわゆるリーディング・スキルのようなものの指導には、本文は使われているのでしょうか。

**伊地知** 明示的にリーディング・スキルの指導をしているわけではありませんが、読むときにはタスクを与え、目的を持たせるようにしています。本文を扱うときには、最初にオーラル・イントロダクションをしてからサイレント・リーディングをさせるのですが、その際には必ずポイントとなる部分に関するリーディング・タスクを与え、答えを探しながら読ませるようにしています。

**山本** 私は特に読むことの指導において、critical thinkingの方法を身につけることが大切だと思っていますが、教科書本文にはやや物足りなさを感じています。それに比べると絵本の持つ魅力は大きく、生徒は、絵本を与えれば、1時間でも黙々と読みふけります。教科書ではなかなかそうはいきません。先を読みたいという気持ちをつくり出すしかけに違いがあるのでしょうか。たとえば『おさるのジョージ』であれば、彼のどんなところがcuriousなのかという部分が軸になって、それを立証する出来事が展開していきます。読みながらしっかりした論拠を拾っていき、クリティカルな読みができるようになっていきます。それが自己表現をするときにも生きてきます。教科書にもそのようなしかけがある

と嬉しいのですが。

**高橋** 読むこと以外の技能に関して、英語の基礎基本を身につけるといふ点においては、本文の役割をどう捉えていますか。

**山本** 非常に重要だと思えます。教科書は誰もが持っている唯一の教材です。授業を何回か欠席してしまった生徒でも、教科書を使って家で学習すればカバーできるような、そんなものになればいいと思っています。

**高橋** 室井先生は、先ほど本文のメッセージ性が非常に重要だというお話でしたが、一方で生徒の英語の基礎力を育てるといふ点については、本文の役割をどのようにお考えですか。

**室井** 私は、たとえば英語を習ったときに、文法が内在化され自動化され、英語のスキルが自分のものとなっていくことはとても重要だと思えます。内容ばかり追い求めてもだめで、英語がわかるようになる喜び、達成感、self-esteemの高まりも大切にしたい。先ほども申しましたが、教科書は内容かスキルのどちらかを求めればよいものではなく、内容とスキルの融合を目指すものではないでしょうか。

リーディング・スキルについては、大仰に構えず、書いた人が一番言いたいことはどこにあるかを探させたり、“but”のあとには本当に言いたいことがあるよとか、そういった読み方を身につけられるように意識しています。読み方が身につけると、自分が書くときにも応用できるようになりますので、そ

ういう発信の部分も目指したいところですよ。

## 暗唱の先にあるもの

**高橋** 中学校の教科書は、いわゆる multi-layered syllabus ということで、様々な観点が盛り込まれていますね。したがって、本文の中にも様々なものが盛り込まれることになるわけです。新出文法事項や新出語彙などの言語材料も呈示しなければならぬし、環境問題や人権など、生徒に考えさせるための内容を持っていないわけにはいかないし、また実生活での「読む」という行為につながるような体験をさせるために、いろいろな形式の読み物に触れさせることもしなければならぬ。実に多様な役割を、本文は担っています。

**根岸** 新出文法事項の導入に適している本文と、メッセージを伝えるための reading passage として優れている本文とは、本来異なってしかるべきだと思いますが、今はそれらがすべて同じ本文の中に混在しているように思います。

話は変わりますが、会話文を本文とした場合、たとえば間の取り方や視線の移し方など、本来会話にとって重要なはずの周辺情報が文字には表れずに捨象されてしまうという問題があります。会話文を指導するとき

## 基礎基本か、題材か

**高橋** 本文の役割をもう一度整理しましょう。一方には、読むための素材としての本文があり、

は、これらを補ってあげる必要があるのですが、うっかりすると見落としてしまうことになり、注意が必要です。

指導についてもうひとつ思うのは、本文は暗唱できるまで徹底的に身につけさせるということが非常に重視されているということです。これは果たして妥当なのでしょうか。本文は高度に限定された文脈の中での例であり、数多く覚えたところでそれをぴったりそのまま使えるような状況に出会うことはほとんどありません。暗唱ばかりに時間を費やして、実際に使ってみる練習をしないのは、いわば素振りばかりをして試合形式の練習をしないようなもので、一番大切なトレーニングが欠けているように思います。このような指導のやり方と、本文の担ってきた中心的なステータスとは、実は深く関わっているように思います。

**室井** 本文を暗記することが最良と信じてやってきたけれども、実はそれだけでは英語ができるようにはならないことがわかってきた。それが批判もされている。しかし我々は、それに代わる方法が見つけられていな

ここには多様な形式と内容的価値が絡んでやや複雑です。もう一方には、いわば language text

なので、相変わらず古いやり方に頼り続けている、ということでしょうか。しかもそこに、本文の内容的価値まで入れようとしている、という。

**根岸** 概ねそういうことですが、ひとつだけ違うと思うのは、まだ多くの人たちは、暗記による学習がだめだったとは思っていないのではないかとことです。多くを暗記してそれを自動化できれば、いつか自分の口から自分のオリジナルのメッセージが出てくるのだと信じているようなところがあるのではないのでしょうか。

**高橋** 暗唱ばかりを追い求め、あたかも暗唱こそが最終目標であるかのようなやり方に対する疑問の投げかけですね。audio-lingual の時代には、よく文レベルの暗唱をやりました。暗唱することがいつか自己表現につながるのではないかという思いがあるわけですが、それは型の練習にすぎないのではないか、型をいくら覚えても、それを自分のものとして応用できるような練習をしなければ表現にはつながらないのではないか、という観点だと思います。

としての本文があり、そこには学習すべき文法事項や語彙・表現などが盛り込まれています。

I  
J  
I  
C  
H  
I  
K  
A  
N  
AN  
E  
G  
I  
S  
H  
I  
M  
A  
S  
A  
S  
H  
IM  
U  
R  
O  
I  
M  
I  
C  
H  
I  
K  
OY  
A  
M  
A  
M  
O  
T  
O  
T  
A  
K  
A  
OT  
A  
K  
A  
H  
A  
S  
H  
I  
S  
A  
D  
A  
O

これらをうまく活用すると英語が使えるようになる。その材料を提供するための本文ですから、ここにはあまり感動などを求めなくてもいいのではないかと、言語の力さえ伸びればいいのではないかと、という考え方です。根岸先生のおっしゃる「置き換えのきく」文章ということにもなるでしょう。あるいは生徒の表現レベルに合った、自己表現のモデルとしての文章ということにもなるでしょう。あまり高度な文章だと生徒には使いこなせないわけですから、話題などにも配慮が必要です。

**伊地知** 先生方のお話を聞いていると、あらためて、教科書の本文はすごいな、様々な要求を満たせるように、手塩にかけてつくられたんだと思いますね。

**高橋** ある意味では、役割が詰まりすぎているという感じもします。

**伊地知** 置き換え可能な文章としての本文という考え方もあります。生徒は内容と表現を結びつけて覚えていることが多いので、印象に残らないような内容では、表現も身につけていかなないのでは、と思うこともあります。どうでしょうか。

**高橋** 内容面でのとっかかりがあれば、文脈に依拠した形で表現が定着するということですね。

**山本** 以前に副教材として使用したものに、英文は豊富だけれども内容がつまらないというものがありました。生徒の自己表現に適したモデルは豊富なのですが、実際に自己表現活動をさ

せてみると、おもしろみがなくて生徒の充実感が得られませんでした。確かに内容が充実していればいるほど苦労は多いのですが、苦労してでも自分で発したいと思った英語は定着率がよく、卒業しても生徒の記憶に残っているものです。簡単に自分のことに置き換えられたり、日常場面ですぐに使えるようなことが定着につながるわけではありません。もちろんそのような練習も必要ですが、それは教科書に求めるのではなく、副教材を使うなどして教員が補えばいいことだと思います。

**高橋** 基礎的な練習も必要であり、一方で生徒の感性に訴える内容も必要である、ということですね。その両方が英語力につながっていくという。

読み物としての内容の重要性という点については、室井先生もおっしゃっていましたが。

**室井** 大学生を相手に、心に残っている英語教科書の内容についてアンケートを行ったら、複数名から *NEW CROWN 3* に掲載の “A Vulture and a Child” があがりました。世界の現実について考えるきっかけになったという感想もありました。教材の持つ力と、若い心のやさしさに感動したのを覚えています。教師は週に十数時間も同じ教材を扱い、準備時間にもそのことを考えているので、深刻な内容を扱うことがしんどく感じられるものです。しかし、生徒にとっては、週に3回くらいはしっかりした内容の文章

と向き合う時間があったらいいのではないかと思います。

一方の英語の基礎力の部分ですが、なんとかして内容のよさと両立させたいところです。たとえば最上級の練習をさせるときに、“... is the most important.” のような空所を補充させると、money などと書く生徒は少なく、peace などと書いてくれるものです。そんな形で英語力と内容が融合できることを求めていきたいですね。おそらく相当高度な要求を教科書に課していることになるのでしょうか。なおかつ、出だしから内容面での負荷を高くするのではなく、わかりやすい入り口を用意して、徐々に内容面を深め、最終的に自分の言いたいことが生まれてくるような設計だと素晴らしいと思います。

**高橋** 最初は負荷がかからないように、ということですね。いきなり真剣勝負に放り込むのではなく、身近な用例から導入してあげるといっていいのでしょうか。その発想は大切だと思います。本文にあまりに思いが詰まっています、難しくなっていると状況があるならば、本文の役割から再考してみる必要があるのではないかといいことです。

**根岸** 新出項目を学ぶときの内容面の負荷の話としては、先ほどの Vulture に好例があります。新出項目は want が目的語と to 不定詞を従える文型ですが、本文の該当箇所は He wanted the world to see the

IJICHI  
KANANEGISHI  
MASASHIMURROI  
MICHIKOYAMAMOTO  
TAKAOTAKAHASHI  
SADAO

problems of Sudan. です。かなりメッセージ性が高いですね。一方、基本文としてあげられているのは Tom wanted me to take pictures. です。こちらのほうが生徒の言語的な身の丈には適しているのではないかと思います。

私の中でまだ答えが出ていないのですが、印象に残るといふことと習得の間には、どのくらいの関連があるのでしょうか。

## 教科書本文に望むこと

**高橋** 最後に、様々なジャンルの読み物に触れる体験を与えるために、中学校の教科書本文に期待するところがあればお伺いします。

**伊地知** 私は都中英研のコミュニケーションテスト作成に関らせていただいているのですが、コミュニケーションという点から、読ませるときにも実際にあり得る場面を想定することが大切だと感じるようになりました。手紙を読むにしても、新聞を読むにしても、生徒が今後実生活の中で英語に触れたときに、そういえば教科書の中でもこういうものを読んだなと実感できるような体験をさせたいですね。そのためには、深く読ませる内容のものとともに、ある程度オーセンティックな内容もあったほうが良いと思います。

**山本** 読むという営み考えたときに、必ずそこには何のために読むのかという目的がありますね。新しい情報を得るためだったり、純粋に楽しむため

エピソードが記憶に残ってはいけるけれど、そこで身につけるべき事項を使って文をつくることはできない、つまり習得できていないというようなこともあるのではないかなど。メッセージ性の強い内容は記憶に残りますが、それと習得とは別のこととして考えたほうがよいのかもしれない。一方で、インパクトの強い文と出会えばそれが身になり、習得につながるというこ

だったり、あるいは強いメッセージ性のあるものを読んで見識を高めたり、感動したり。いろいろあると思います。教科書の中で、そのバランスが取れているといいと思います。

**高橋** 一口に本文といっても、読む目的を明確にして、それに応じた本文をつくっていく必要があるということですね。

**根岸** リーディングの問題を作成するときでも、誰が、どんな場所で、どんな目的で読むのかということを考えていくと、実生活で出会うような自然な文章に近づいていきます。そういった教材をつくるには、作り手が豊富な経験を持ちつつ、生徒にとってはどのような体験が現実的なのか、生徒は実生活の中でどんな物を読んでいるのかということに敏感になっている必要があると思います。生徒が実生活で英語を読むことはまだ少ないでしょうが、日本語で読んでいるジャンルの読み物を把握した上でその英語版を見せてあ

とも否定はできないので、まだ悩んでいるところです。

**高橋** 泳ぎ方を教えるとき、昔は水の中に放り込んだものですが、今は違いますね。段階を追って技術を教え、到達目標をつくり、学び方のプロセスを示す時代です。そのような時代に、これまでのようにいきなり真剣勝負の本文でよいのだろうかという疑問は、共有できていると思います。

げれば、生徒の目が実際の英語に向かっていきやすいでしょう。現状では教科書の本文という存在が、教科書の外にある実際の世界とつながっていないため、教科書内だけで学習が完結してしまい、実生活に結びついていけないことがあるのではないのでしょうか。レシピがあったり、時刻表があったり、実際に読む物に応じたような多様性が教科書の中に入ってくれば、生徒が教科書以外でも英語を読み始めるきっかけになるかもしれません。

**高橋** 本文が何のためにあるのかという問いは、これまで正面から取り組んだことがあまりなかったと思います。容易に結論がでるような問いではありませんが、今日は多くの示唆をいただきました。これからも引き続いて、本文とは何か、どうあるべきかを、子どもたちの視点を忘れずに考えていきたいと思えます。本日はありがとうございます。(2008年1月)

## これからの10年間に備えよ

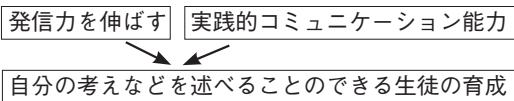
斎藤 栄二 Saito Eiji  
(京都外国語大学)

### 1 「自分の考えを述べることのできる生徒」の育成

今はどういう時か、考えてみよう。新学習指導要領案が発表され、これからの約10年にわたって私たちの行う英語の授業の方向を示し続ける。そして規制し続ける。そういう時である。

この案の中で、中学校で目を引くのは、英語の授業時数が、週3から週4に変わることである。高校では、現行の科目名に代わって、「コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」や「英語表現」などの登場となるであろう。それらの改変を通じてどういう方向が出てくるのか。

英語の授業に、発信型の力を伸ばす方向が一層求められるのは間違いない。発信型の方向とか、実践的コミュニケーション能力の育成とか、ずっと聞かされてきているが、その具体的な中心の1つは、「自分の考えなどを述べることのできる生徒の育成」である。



### 2 最近の経験

#### (例1) 高校の授業

拝見した授業では、生徒の声も高校生としては珍しくよく出ている。pair work も大きな声で行っていた。活発な授業である。それなりの優れた授業といえる。授業が終わってから私は、

「教科書のエクササイズの中に、自分の感じ方を述べる発問が準備されていましたが、あの部分を省略されたようですがどうしてでしょうか」と問いかけた。その先生は「まず基礎ができてから、

そういう種類の課題に取り組みせようと思っています」というものであった。

す」というものであった。

#### (例2) ある研究発表1

ある高校の先生の研究発表を聞いた。研究発表を引き受けたくらいであるからかなり自信を持たれている様子の発表であった。そういえば、その先生のお名前は、研究会の要綱で何度か拝見したことがある。私にとっては、その先生の研究発表を聞くのは初めてである。私は「生徒が自分の考え方を述べるようになる手立て」をその先生がどのように立てておられるのか、そのこと1点に絞って聞いていた。しかしそこに行くとやや曖昧に「基礎をやってからそっちの方向に行こうと考えています」と述べて終わられた。

#### (例3) ある研究発表2

優れた研究発表であった。学生のレベルはかなり低い。それにどう対応するのか。そのための実践を紹介された。授業構成もしっかりしている。研究発表のあとフロアから質問が出た。

「自己表現力などはどのように伸ばされますか」

発表者は「a や the の使い分けもできていない学生ですから、自己表現力といっても、無理だと思います。やはりもう少し基礎を積みあげてからのことになると思います」と述べられた。会場の先生方の間には「それはそうだろう」という感じがあってなんとなく納得したようであった。しかしその日に呼ばれていた講演者は、心理学専攻の方であるが、その後の講演の中で、この考え方にやんわりと疑問を呈された。私はさすがに鋭いと思った。ただ研究発表したご本人にその意味が伝わったかどうか。

### 3 問題点は何か

(例1)についても(例2)についても、私が口先まで出かかっていた言葉は、

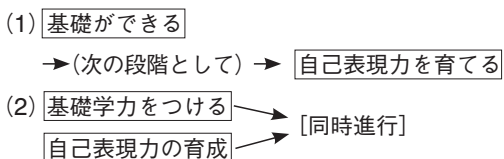
「それでは先生、先生のいう基礎というのは、いつできあがるのですか？」

という言葉である。今まで多くの実践を拝見してきたが、「基礎学力ができました。それではこれから自分の考えなどを述べる生徒を育てるための授業に入ります」などと段階を踏まえた意識を持たれた先生には1人として出会ったこともない。多くの先生が述べられる「基礎学力をつけることができた時」というのは永遠にやってこないのである。そうである限り、先生方は今いちばん要求されている「自分の考えなどを述べる生徒を育てる」授業の方向に目を向けず、また多くの力がその方向に注がれないことになる。厳しい言い方をさせてもらおうと、「基礎学力ができてから」というのは一種の逃げではないか。

a と the の使い分けについては、上越教育大の平野綱枝先生の研究とその発表を思い出す。中学2年生の段階における冠詞の使い方の誤りは約20%と出たそうだ。そこで大学生の場合にも調査したところ、やはり冠詞の誤りは20%前後だったようだ。だとすれば「冠詞の使い分けができるのを待つ」というのは、いくら待ってもそういう時期はやってこないということになる。この私の指摘はやや突飛かもしれない。しかし「基礎学力をつける」→(そのあとで)→「自己表現力をつける」という種類の考え方をここで砕いておかなければならない。それがこの稿の目的である。そうでなければこれから10年の新しい学習指導要領の方向に沿った授業の展開は功を奏さないであろう。

#### 4 これからの方向

子供の言語習得を考えてみよう。子供は a や the の使い分けができてから自分の考えを述べ出すなどということはない。a や the の使い分けも自己表現の力も同時進行的に起こるのである。図示すれば(1)ではなく(2)である。



(1)は段階的であり(2)は共起的である。(1)から(2)へ持っていくためには、かなりの指導力が要求される。

基礎学力をつける方法の1つとして文型練習がある。簡単な例を挙げると What is this? It is (an apple). のようなやりとりで( )の中の果物をいろいろと替えて練習していく。この文型練習と、自分の考えを述べる練習とを比較してみよう。次の表をご覧ください。

	文型練習	自分の考えを述べる練習
言いたいこと	/	×
文型例	○	×
意味	○	×
相手の反応	○	×

○は最初から与えられていること、×は与えられていないことを示す。したがって×のところは自分で考えなければならない。文型練習では What is this? It is (an apple). と文型例は与えられているから○、文型例が与えられていれば当然意味もついてくるから○、そして相手の反応も分かっているから○である。しかし自分の考えを述べる場合は、まず「何を言いたいか」を考えなければならない。その次はその言いたいことを表す英語の文を、自分の手持ちの中から探さねばならない。それを相手に発話したとして、相手がどう反応してくるかも予想できない。したがってすべてにわたって×なのである。(1)と(2)の間にはこれだけの開きがある。

しかしこの(1)と(2)の間に存在する川を渡ってほしい。そういう実践を展開してほしい。シーザーが元老院の命令を無視してルビコン川\*を渡ったように、従来の考え方を離れて新しい向こう岸に足を踏み入れてほしい。私もささやかながら皆さんと力を合わせたい。その行き先にこれから10年間の英語の授業の展望を私は見たいと願っているのである。

\* ルビコン川は古代ローマにおいて、イタリアとその北の属州ガリアとの境界。軍団を連れてここを渡ることは反逆とみなされ、禁止されていた。シーザー(カエサル)はルビコン川を渡る時に「<sup>さいこくろ</sup>賽(サイコロ)は投げられた」と言った。後戻りをしない重大な決断を意味した。



# リーディング・テスト 作成の心得

根岸 雅史 Negishi Masashi  
(東京外国語大学)

今回は、リーディング・テストのつくり方を扱う。リーディングのテストは、中学校でも定期試験などでよく作成されるが、いくつかの問題点も散見される。以下に、リーディング・テストを作成する際に必要な心得をまとめてみる。

## 1. テキスト（文章）はどうするか

定期試験におけるリーディング・テストでは、教科書の「本文」を使う。このごく当たり前のことをもう一度見直してみようと思う。教科書の「本文」ということは、授業で生徒の誰もが読んでいるということである。多くの場合、たとえ英語は覚えていなかったとしても、内容は覚えている。このようなテキストを用いてのリーディング・テストは、本当に生徒の読解力を見ているとはいいがたい。

だとすると、リーディングのテストで読解力を見るというごく当たり前のことを定期試験で実践するには、すでに習ったテキストを用いることは避けなければならないだろう。では、どのようなテキストを用いるかとなれば、習っていないテキストということになる。具体的な方法としては、教科書のテキストとパラレルなテキストを作成する方法が考えられる。「パラレルなテキスト」とは、文章の構成などは同じだが、単語が異なっているテキストである。

この方法は、学年が上がって、テキストの内容がトピックを深く掘り下げたようなものになってくると、あまり応用が利かなくなる。「パラレルなテキスト」の作成が困難な場合は、他社の教科書の同様のポイントを含んだ箇所を参考にしてもいいだろう。ただしこの場合は、未習の単語や文法事項がないかどうかチェックし、未習のものは注をつけたり

書き換えたりなどする必要がある。

定期試験では、実は意外なほど内容理解問題の出題が少ないのだが、これは既習のテキストをテストに使用しているためであろう。テキストがあり、それにいくつもの問題がぶら下がっているために、一見すると読解問題に見えるかもしれないが、よく見るとテキストの内容理解を問う問題が含まれていないことも少なくない。これはいわゆる「総合問題」である。注意をしなければならない。

## 2. 「会話」は読むものか

中学校の定期試験や高校入試問題を見ると、「会話文」の読解問題が出題されていることがよくある。当初は、リーディングの問題なのになぜ「会話文」を読ませるのか私にはよく理解できなかったが、いろいろ調べてみると、教科書の「本文」には「会話文」があり、これをもとにテストをつくるので「会話文の読解問題」となってしまうということがわかった(高校入試問題はこの延長で出題されていると思われる)。現行の教科書の「本文」を見ると、実にたくさんの会話文があることに気づく。しかしながら、現実の生活の中で「会話文」を読むことは多くないだろう。確かにインタビュー記事や劇の台本などでは「会話文」を読むことになる。ただ、これらを読む可能性は、他のタイプの文章を読む可能性に比べればはるかに少ないだろうし、教科書に載っているような「会話文」は、インタビュー記事や劇の台本などとはまるで異なるものである。

リーディング・テストの作成にあたっては、生徒が実生活で読みそうなテキスト・タイプから文章を選ぶべきであろう。そうすることで、オーセンティックなタスクが作りやすくなる。「会話文」と



いうテキスト・タイプを読むことが現実の生活では起こりにくいとする、それに伴う現実的なタスクを考えることは難しい。

### 3. どのような「質」の理解を問うか

読解問題をつくるにあたり、どのような「質」の理解を問うているかに関して、あまり意識が向いていないことが多いのではないかとにかく文章を持ってきて、そこから問えることを場当たりの次々作問していく、という具合である。この場合、どのような「質」の理解を問うかは、その文章によって大きく左右されてしまう。

読解問題が問うている理解の「質」としては、いくつかのものが考えられる。よく用いられるメタファーとしては、*read the line / read between the lines / read beyond the lines* というような分類がある。具体例を見てみよう。以下は、*NEW CROWN 3* (平成18年度版) Lesson 7 'A Vulture and a Child' から取った文章である。

Sudan is a large country in northeast Africa. It is a country with great promise. But it also has great problems.

In 1993 the people of Sudan suffered from war and hunger. Few people knew about this. Kevin Carter went there to work as a photographer. He wanted the world to see the problems of Sudan.

One day Carter saw a child. She was lying on the ground. He knew why the child was there. She was so hungry that she could not move. Suddenly a vulture appeared. He took this photo.

The photo appeared in newspapers all over the world. It made him famous. He won a Pulitzer Prize for it.

このような文章の読解問題で、たとえば *Where is Sudan?* というような問題を出したとしよう。この問題には、冒頭の *Sudan is a large country in northeast Africa.* という1文を読めば解答できてしまう。このような問題を *read the line* タイプの

問題と呼ぶ。

これに対して、*What made Carter famous?* という質問に対しては、*The photo appeared in newspapers all over the world. It made him famous.* という部分を読んで、*it* が *the photo* を指していることを理解して解答しなければならない。このような問題を *read between the lines* タイプの問題という。通常、*read between the lines* というのは「行間を読む」ということで、書かれていない内容を推測することをいうが、この分類では、複数の文にわたる理解を問うような問題のことをいう。

また、*Why did Carter take this photo?* というような問題を出したとすると、これに対する答えは直接的に書かれているわけではないので、文章全体を読んだ上で推測して解答する必要がある。このようなタイプの問題を *read beyond the lines* タイプの問題という。

自分のつくった読解問題がどのような「質」の理解を問うているかを知るには、上で見たように、その問題に解答するために文章のどの部分を読み、それをどのように理解できるとその問題に正解するのかを自分でモニターしてみるといい。読解問題では往々にして、表面的な読みを問う問題 (*read the line* タイプ) が多くなる。まず、そのリーディング・テストの目的を確認し、その目的に合ったタイプの出題を心がけるべきである。

### 4. 問題同士の依存がないか

中学生を対象としたリーディング・テストでは、文章が比較的短い。それと同時に、その短い文章に複数の問題が「ぶら下がっている」ことが多い。そのために、1つの問題が別の問題の答えを示してしまっていることがある。これを「問題同士が依存している」というが、こうした設問づくりは避けなければならない。たとえば *Did Yumi go to Okinawa?* という問題があり、その後で *What did Yumi buy in Okinawa?* という問題があると、後者の問題から、ユミが沖縄に行ったことは自明であろう。このような依存を避けて、1つの文章に1つの問題しかぶら下げないというやり方も検討してみてもよいだろう。

## 「書くこと」の指導 [2]

### — 他技能へつながる writing —

山下 敦子 Yamashita Atsuko (岐阜市立明郷中学校)

#### ① 「静」と「動」

私の実践の中で、書く活動は大きく2つに分けることができます。1つは「静」で、もう1つは「動」です。「静」の writing というのは、文字通り、黙って静かに書くというものです。前回の授業レポートで取りあげた体育大会の感想を書くというのは、「静」の writing にあたります。心の高ぶりはあるものの、ざわざわした雰囲気ではなく、黙って静かに自分の思いを文字にしていくという活動です。もう1つの「動」の writing というのは、speaking につながる writing です。簡単なスピーチを目標にし、ゴールを自分でイメージしながら、作業を進めていくものです。この場合は、書きながら、英文を声に出して読んでいきます。書く活動を通して、話す練習をしていくわけです。1文書いたら、1文読みあげる。2文、3文と足していくごとに、もう一度、最初から読みあげて、文のつながりを見ていきます。いわゆるスピーチの原稿づくりなのですが、この作業は、生徒たちが、ワイワイと声を発しながら進めていきます。隣の生徒や、班の仲間が言った文を、「ああ、その文いいねえ」などと言いながら、どんどんまねし合ったりもします。こうすることで、仲間同士の教え合いができます。

ただ、表現させるためには定着させる必要があります。この段階の活動としてお勧めするのは、関係代名詞を使ったカルタです。uncle, aunt, monkey, horse, computer などといった人物や動物、ものを表した単語カードを20枚ほど並べます。読みあげる文は、This is an animal which can run very fast and can be seen in Kasamatsu. (※岐阜には笠松競馬場があります) とか、This is a person who is a sister of one's mother or father. という文です。動物のカードも人のカードも複数枚あるので、関係代名詞の先行詞まででカードを取することはできず、関係代名詞以降も集中して聞き取らなければなりません。受験を控えた3年生の生徒たちが精神的に疲れてきた頃に、この活動を取り入れると、どんなクラスでも、どんな状態でも、元気になります。関係代名詞を理解するというより、キーワードを聞き取れば活動には参加できますから、どんな生徒でも楽しめます。このように、関係代名詞を何度も耳から input していくと、生徒たちにとって、This is a boy who ..., This is a dog which ... などという文は、苦痛ではなくなります。そうなったときにうってつけの活動が、次に紹介する実践です。

#### ② 書く活動を行う前に

今回紹介するのは、3年生の後期に学ぶ関係代名詞を扱った実践です。関係代名詞は、現在の学習指導要領上では理解の段階にとどめるという文法事項です。ところが、この関係代名詞は実際にはよく使われ、知っていると非常に便利な構文です。理解の段階にとどめておくには、もったいない構文の1つで、私は授業の中で表現させることもしています。

#### ③ This is a robot which ...

生徒たちは、現実の世界から離れ、想像することがとても好きです。今回は、生徒に次のような投げかけをします。

「あなたは、株式会社 YAMATSU の開発部の優秀な社員です (ここで優秀という形容詞をつけることが大事です。ちなみに YAMATSU とは、私の名前からつけたものです)。YAMATSU の社長は、もちろん私です。今回の社長からの指令は、『世の中に

役立つ商品を開発しろ』です。さあ、どんな商品を  
開発してくれるかな?」

開発商品のプレゼンテーションの手順

手順1: 世の中に必要とされそうな商品をイメー  
ジし、その商品の説明を考え、プレゼン  
原稿を書く。[writing]

手順2: 各支店の中でそれぞれがプレゼンテー  
ションをしたあと、支店長が中心となっ  
て話し合い、支店代表を決める。  
[speaking]

(ここでは、班ではなく支店、班長ではな  
く支店長と言います。支店長と言われる  
だけで、気分の乗る生徒もいます。)

手順3: 各支店の代表作品をクラスで発表する。  
また、他の支店の発表を聞く。[speaking,  
listening]

手順4: 各支店の代表作品のプレゼン原稿を読み、  
消費者としての意見を書く。[reading,  
writing]

(発表を聞くときは、プレゼン原稿を見ず  
に聞くだけに徹し、その後確認の意味で、  
商品のプレゼン原稿を読むようにします。)

書き出すときは、イメージした商品を簡単に絵で  
描くことから始めます。絵を描くと初めて 'this' と  
いう言葉が生きてきます。最初に自分の開発した商  
品名を言っても、最後に言っても、それは自由。と  
にかくどう相手をひきつけるかが問題。大事なこ  
とは、その商品で何ができるかということ。どんな  
ときに、どんな風に役立つのかということです。これ  
も、いきなりでは書くことができませんが、最初に、  
私が社長としてモデルを見せ、その説明を聞かせま  
す。そうすることで、どんなふうに書いたらいいの  
かがわかります。また、関係代名詞も自然に入って  
きます。そこには、前述の関係代名詞のカルタを何  
度か繰り返し行っているという事前の input がある  
からです。

生徒が書いた文を2つ紹介します。

生徒の作文(添削前)

This is "Nounai Helper".  
This is a robot which can teach anything.  
When we can't study, this Nounai Helper will help  
you.  
And it's very small.  
It is 0.1 meters tall, so when we have tests, we are  
taught by it.  
But you can use this only three times.  
So be careful.  
I can't put price tags, because there is a value  
which we can't buy.  
But if I put price, it is 300 yen.  
Why don't you buy a thing that money can't buy?  
We have only a few Nounai Helper.  
So come soon.

4. プレゼンに向けて (手順 1)

「あなたは、社内でも NO. 1 の新商品開発部員で  
す。今回も、新しい商品をつくりました。社内での  
プレゼンテーションが明日あります。頑張って、原  
稿を仕上げてください。」

このような指示を出し、次のようなワークシート  
を用意して原稿を書かせます。

<p>ここには商品の イメージを描か せる。</p>	<p>株式会社 YAMATSU 商品開発部 社員名:</p> <p>.....</p> <p>A4 判で、20 行ほどの ..... 罫線をいれておく。 .....</p> <p>.....</p> <p>.....</p>
------------------------------------	--

This is great. This is a secret pen.  
This is a pen which we can see in many places,  
but when we use it, it makes us surprised.  
Do you know why? Because it is a special pen!  
This pen isn't a normal pen.  
I have done something interesting.  
For example, when I am sleepy, the electric power  
makes us awake. So I can't sleep.  
I think that it is good for Jukensei.  
You can see history's nengo.  
I can't remember the nengo.  
In such a time, it can write 1192 on the answer  
sheet. 1192 is the year when Kamakura era  
started.  
So I can solve the problem.  
But it has a big problem.  
It can teach easy things.  
For example, 1+1=2, oxygen is O2.  
But this can't answer to difficult questions. So this  
is not so useful for Jyukensei. But why don't you  
buy it?

このような文を書くときには、黙って書くのではなく、隣の生徒や班の仲間と話しながら、ワークシートに英文を書いていきます。書いたら、書いた文を自分で口に出して読んでみるように指示します。

また、わからない表現はあえて難しい英語に直しません。難しい英語を使ったとしても、のちにプレゼンをしたときに、みんなにはわかってもらえません。あくまでも習った構文で、自分たちの力を超えない範囲内で、英語を書くことを目標とします。言いたいことを3年生で学習した構文を利用してうまく表現できている場合には、それを板書したりしながら、学級で広めていきます。

うひとひねりします。自分が気に入った商品についての感想を英語で書くという活動を取り入れます。発表を耳で聞いたあとに、そのプレゼン原稿をコピーして配り、読ませます。自分が気に入った商品のプレゼン原稿をもう一度改めて読み、『消費者の声』として感想を書きます。ここでは感想を書くときの書き出しだけを指導します。

I am interested in .... I want to buy ....

I want the robot which is made by ....

これだけ与えれば、何がどういいのかを、原稿をまねしたり、自分のつくった商品と比較したりしながら、書きすすめていくことができます。

## 5. さあ、発表(手順2,3)

さあ、原稿が完成しました。次は、支店(班)内のプレゼンテーションです。自分が描いたイメージの絵を見せながら、読みあげていきます。

生徒の作文(添削前)

I want to buy Nonai Helper, because this is the robot which can teach anything. I like Nonai Helper better than anything else. If I buy this robot, it will help me and I can enjoy using it every day. I hope using this robot makes me happy.

株式会社 YAMATSU ( ) 支店  
支店長名: \_\_\_\_\_  
商品開発部 社内プレゼン (日付) \_\_\_\_\_

NAME	熱意 (アピール度)	英語らしさ	説明の量	商品の 面白さ
班員の名	簡単な文章で評価	◎○△	◎○△	◎○△

I am interested in "Secret Pen", because I have to study hard every day. But I can't remember the nengo. And I can't keisan, too. So I need "Secret Pen". I can hide "Secret Pen" in my pen case. I have wanted such a robot like this for a long time. I am happy to see the robot made by Ayaka. I want the robot made by Ayaka. How about you?

このワークシートを使いながら、お互いに評価して、支店代表を決めます。このとき、発表の仕方をポイントにするのではなく、あくまでも書いた英文の内容や量にこだわりたいものです。おもしろおかしくアピールしたから代表になるということがないようにするため、単純に合計得点を出して決めるようなことはせず、支店長を中心とした話し合いで選んでもらいます。実際には、本社(学級)での発表を控えますから、いい加減なものを選ぶとはしません。支店代表が決まったら、本社で発表します。

## 7. 活動を一連のものに

今回の実践での成果としては、writing で始めて writing で終わるといった活動なので、形となって残り、生徒たちの理解度、定着率は speaking だけの活動よりも高いものになったと思われます。定期テストでも、この授業でつくった原稿をスピーチとして出したのですが、多くの生徒が自分や仲間のつくったスピーチを覚えていました。学習活動そのものを一連のものとしたり、学習活動(領域)のバランスを考えたりしたことが、生徒の学習意欲の持続につながったとも思われます。何よりも、このような活動をするたびに、生徒の思わぬ発想力に脱帽します。

## 6. さらに writing をもうひとつ(手順4)

ここで、活動としては終わりそうなのですが、も

# Just Now

## 「目標」に正対した授業づくりとは

渋谷 徹 Shibuya Toru  
(新潟県新潟市立新潟小学校)

### I 小学校における外国語活動の2つの目標

平成20年2月15日、新学習指導要領案が発表となった。それに伴い、小学校における外国語活動の目標も次のように明確に示された。

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

目標が明示された今、現場は目標に正対した授業をどのようにつくっていけばよいのかを考え、その具体を示していかなければならない。本稿では、目標に正対した授業の具体について述べる。

### II 言語や文化について体験的に理解を深める

この目標に向かうためには、理解を深めるべき「言語や文化」を題材として設定する必要がある。文部科学省は既に試案として10題材を示している。

本稿では、「漢字」を題材の1つとして提案したい。「英語活動で漢字？」と意外に思われる方も多いだろう。しかし、漢字は「言語や文化」そのものであり、大きな可能性を持った題材である。後述の活動例をお読みいただきたい。

### III 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る

「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態

度」を育成する授業を具現することは容易ではない。「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の中身が曖昧だからである。育成すべき中身が曖昧のままでは、授業の具体を考えることはできない。

そこで、私は「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を次のように定義している。

- 相手の話す英語を聞いて、それを理解しようとする態度をもつこと(推測)
- 相手に何らかの反応を示そうとする態度をもつこと(反応)

「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を「推測」と「反応」という2つのキーワードで考えているのである。

私は、コミュニケーションとは「意味内容を伝え合うこと」であると考えている。伝え合いたい意味内容がなければ、コミュニケーションは成立しない。このような状況下で「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を育成することは不可能である。したがって、まずは、児童たちが推測しなくなったり反応しなくなったりするようなコミュニケーション活動を開発する必要がある。

以下に示す活動例は、この要求にも応えるものである。「知っているようで知らない」という半知の要素が児童たちの知的好奇心を刺激するからである。

### IV 活動例1「この漢字読めるかな」

児童たちにとっての難読漢字を板書して示し、英語のヒントを与えながらその読み方を考える活動である。次のように進めた。

I'll give you some *kanji* quizzes. If you know the answer, raise your hand. The first question is easy.

Q1 「海老(えび)」

What's this *kanji*?

Yes. It's ocean, 'umi'. This animal lives in the ocean. This *kanji* means 'old'. This animal has a long body and many legs. We eat it as *sashimi*.

The answer is 'ebi'. It's 'shrimp' in English.

Q2 「海星(ひとで)」

This *kanji* means 'star'. This animal looks like a star. It's 'starfish' in English.

The answer is 'hitode'.

Q3 「海月(くらげ)」

This *kanji* means 'moon'. Do you know the answer? Do you want some hints? This animal has a clear and soft body. It can sting you. It looks like an umbrella. It's 'jellyfish' in English.

The answer is 'kurage'.

Q4 「海豚(いるか)」

This *kanji* means 'pig'. This animal can swim very fast. It can jump up very high. It's very smart. We can see it in aquariums. It's 'dolphin' in English.

The answer is 'iruka'.

Q5 「海馬(とど)」

The last question is difficult. This *kanji* means 'horse'. What's this animal? It lives in the ocean. It's big. It's 'sea lion' in English. It looks like a seal, 'azarashi'.

The answer is 'todo'.

漢字は表意文字である。英語のヒントだけでなく、漢字のもつ意味そのものが読み方を考えるための手がかりとなる。これは、漢字という言語文化がもつ大きな特徴である。

## V 活動例2「中国ではどんな意味？」

漢字は中国から伝わった。しかし、同じ漢字でありながら、日本語と中国語では大きく意味が異なるものがある。意味の違いを知った子供たちはその意外性に驚くこととなる。

Q1 「走(歩く)」 ※ ( )内は中国語での意味

Can you read this character? It means 'run' in Japanese. But it has a different meaning in Chinese. What does it mean in Chinese? You can answer in Japanese. It's 'walk' in Chinese.

Q2 「湯(スープ)」

It's 'hot water' in Japanese. But it's not 'hot water' in Chinese. What is it in Chinese? It is 'soup' in Chinese.

Q3 「娘(母親)」

It's 'young woman' in Japanese. What is it in Chinese? It's 'mother' in Chinese.

Q4 「手紙(トイレトペーパー)」

It's 'letter' in Japanese. What is it in Chinese? It's 'toilet paper' in Chinese.

漢字を使っている国は、中国と日本だけではない。韓国での使われ方なども比較の対象にするとおもしろいかもしれない。

## VI おわりに

英語活動は、全国ほとんどの学校で実践されるようになった。しかし、これまで、その中身は多種多様であった。「小学校英語活動実践の手引」(文部科学省)は示されていたものの、実際の授業は、目標も内容も方法も、そして時数もバラバラであったのである。

今回、小学校における外国語活動の目標は明確に示された。これからは、同じ方向を向いた実践が積み重ねられなければならない。そのためには、「コミュニケーションとは何か」について考え、そのとらえ方を一致させることが必要である。

## 絵本で読み聞かせ

— 小・中学校の英語学習をつなごう

山本 玲子 Yamamoto Reiko  
(京都教育大学附属京都中学校)



読み聞かせを意図したビッグ・ブック。まとまった内容を豊かな表現で聞くことは、英語という言語を受け入れる素地を作ることにもなります。

小学校英語の現場では、読み聞かせの実践が多く見られます。低学年向けのタスクだと思われる方も多いでしょうが、高学年から中学生にかけては、自我の成長もあってゲームやクイズ的な活動への積極性を失う時期でもあり、児童の知的好奇心を満たし、かつ英語の魅力を再発見するために、読み聞かせが効力を発揮します。初期学習者には、クラスルーム・イングリッシュを越えた豊かなインプットが必要です。絵本の読み聞かせの実践で見られた児童の反応を以下に紹介します。

**題材** *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?* (Bill Martin and Eric Carle), *Five Little Monkeys Jumping on the Bed* (Eileen Christelow), *The Very Hungry Caterpillar* (Eric Carle) など

**反応** 低学年から慣れ親しんだ簡単な絵本を繰り返し読み聞かせる→以前より理解度が向上していることを実感できるため、幼児向け教材に対し拒否反応を見せる高学年児童も、絵本に対する反応は上々である。

**題材** *The Magic Porridge Pot*, *Little Red Hen*, *The Story of Silent Night* など

※有名な話のため、様々な作家が手がけている。

**反応** 語彙・文法ともに難易度の高い物語を読み聞かせる→わずかでも理解すれば達成感を持ち、次はさらに理解しようとする意欲が向上する。

英語圏の子どものために書かれた絵本やライムは、リズムや押韻の工夫がされているものが多く、その魅力的な響きが特に児童の心をとらえ、訳さなくても意味を予想でき記憶にも残る(実際、覚えて口ずさむ児童がいる)ことに着目し、そこからより

効果的な読み聞かせの方法を考えました。

- ① タイトルの意味、登場人物などの最低限の情報を与えたあと、日本語での説明は一切与えず、物語全体を通して読み聞かせる。
- ② 教師はリズムや押韻を強調し、声の調子や大きさを工夫し感情を込めた読み方を心がける。
- ③ 児童同士の交流タイムを設け、想像した意味やわからない単語を出し合ったり、どこが面白かったかを発表したりする。
- ④ 教師は児童同士の交流で出てきた質問には答えるが、全体的な日本語訳は与えず、次の授業で再度、物語全体を通して読み聞かせる。

このように日本語訳をすぐに与えないことで、児童たちは物語を想像しながら耳をすませて聞き、語と語の境界や微妙な発音に注意を払うことになります。その結果、単語単位ではなく、チャンク(意味を成す句)単位で理解し丸覚えしていく様子が手にとるようにわかります。それは、形式から入る学習と異なり、場面と一致させて記憶に残すための理想的な学習ではないでしょうか。

中学1年生にも同じ本を読み聞かせたところ、未習語彙の意味をほぼ正確に予想することができ驚きました。また「自然と意味がわかって達成感があった」、「読み聞かせをしてもらうのは小学校以来で楽しかった」という声が上がっていました。生徒の意欲やそのレベルにより、題材の難易度を調節できるのが読み聞かせの利点です。小・中学校の英語教育をつなぐ意味でも、小・中学校の先生方に是非とり入れていただきたいと考えます。

## 夏季英語教育セミナー，専門研修講座のお知らせ

## 2008 夏季英語教育セミナー

日 時：2008 年 8 月 1 日（金）10:00～16:00

会 場：中野サンプラザ URL <http://www.sunplaza.jp/>

（東京都中野区：JR 中央線・総武線／東京メトロ東西線「中野」駅北口より徒歩 1 分）

主 催：NPO 法人 ILEC 言語教育文化研究所

協 賛：株式会社 三省堂

対 象：中学校英語教師，中学校英語に関心をお持ちの方

定 員：120 名

参加費：4,000 円

内 容：《講演・ワークショップ》

I 「これからの英語教育 — 確かな『言語力』の育成のために」

森住 衛（もりずみ まもる） [桜美林大学大学院教授]

II 「効果的な英語学習法とは — 音読を例にして考える」

竹内 理（たけうち おさむ） [関西大学大学院教授]

III 「授業の構成を考える — 変化と継続の両立」

杉本 薫（すぎもと かおる） [東京都江東区立東陽中学校教諭]

IV 「授業を楽しくするヒント — 英語落語に学ぶ」

大島 希巳江（おおしま きみえ） [文京学院大学准教授，英語落語プロデューサー&amp;パフォーマー]

※参加される方全員に同じプログラムを受講していただきます。

※タイトル・内容は一部変更することもあります。予めご了承ください。



## ILEC 平成 20 年度前期英語専門研修講座

日 時：2008 年 5 月中旬～6 月下旬（火・木）19:00～21:00

会 場：当研究所セミナールーム（三省堂本社 1 階）

対 象：小中高の教師，学生（学割あり），一般の方

参加費：1 講座につき 3,000 円を予定しています。

内 容：毎日の英語授業の改善・創造を目指し，現在英語教育界で活躍している講師陣が明日からの授業に役立つ講義と実習を行います。全 6 講座を予定しています。

## セミナー，専門研修講座のお申し込み・お問い合わせ

NPO 法人 ILEC 言語教育文化研究所

〒101-0061 東京都千代田区三崎町 2-22-14

TEL 03-3230-9473 URL <http://www.ilec.jp/>

※セミナー，講座の詳細はホームページで順次ご案内する予定です。

TEACHING  
ENGLISH  
NOW

12 号

2008 年  
4 月 1 日発行  
定価 80 円  
(本体 76 円)編集・発行人：八幡統厚  
発行所：株式会社三省堂

〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14

電話 (03) 3230-9422 (編集)

振替 東京 00160-5-54300

[NEW CROWN ホームページ]

<http://tb.sanseido.co.jp/newcrown/index.html>

印刷：三省堂印刷株式会社

〒192-0032 東京都八王子市石川町 2951-9

電話 (0426) 45-6111 (代)

## 編集後記

新学習指導要領案は，小学校に「外国語活動」が必修で 5, 6 年生（各学年 35 時間）に新設され，また中学校の「外国語」は 4 単位に増え，取り扱い単語数も 1200 語程度に増えるなど，内容が変わります。小学校における外国語活動により，一層，小・中学校の連携が大切になりそうです。



基礎からマスター [読む・聞く・話す]  
わかりやすい基礎高校英和辞典

小型版新発売

# ビーコン英和辞典第2版 [小型版]

持ち運びに便利な  
ハンディサイズ!

宮井捷二 監修/三省堂編修所 編  
A6 変形判<2色>  
1,696 ページ+カラー 12 ページ  
定価 2,310 円 (本体 2,200 円+税)

- 高校教科書から徹底採録して  
見出し語 57,500  
(英和 47,300, 和英 10,200)
- カナ発音併記の場面別英会話 200
- 《語源》《日英比較》を加えた新式 12 種の工夫
- [カナ発音] [和英] 付き

通常のサイズもあります (普通版)

ビーコン英和辞典第2版  
宮井捷二 監修/三省堂編修所 編  
B6 変形判<2色>  
1,696 ページ+カラー 12 ページ  
定価 2,835 円 (本体 2,700 円+税)



三省堂 Web サイトで提供

## 『三省堂中学校英語ワークシート』の紹介

- ◎ 授業内で使うドリル式ワークシート (WORD ファイル)
- ◎ Web サイト (URL <http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/index.html>) からダウンロード
- ◎ 文法事項ごとにまとめられ、Step1 ~ 3 で、繰り返し練習



### ■ Step 1

- 《大問1》 語句穴埋め問題 (選択肢あり)
- 《大問2》 ① 語句並べ替え問題 (一部)  
② 語句並べ替え問題 (全体)

### ■ Step 2

- ※ Step 1 と同じ英文を使い、タスクをかえて練習。
- 《大問1》 語句穴埋め問題 (選択肢なし)
- 《大問2》 ① 語句穴埋め問題 (一部)  
② 和文英訳

### ■ Step 3

- ※ Step 1・2 の《大問2》の和文英訳を集めたもの。

## 2008年4月新刊案内

斎藤栄二 著

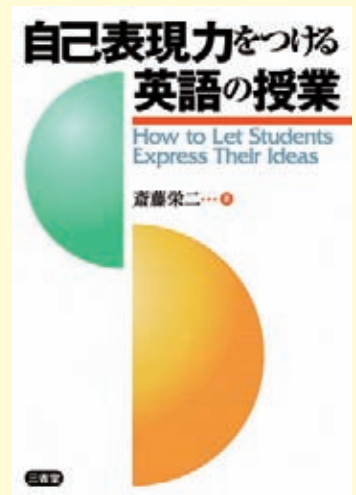
### 自己表現力をつける英語の授業

2,100円(税込) 四六判 192頁 ISBN 978-4-385-36353-0

自己表現の語彙の増やし方、質問作成能力のつけ方、Discussionの仕方、Read and Look upの仕方など、実践を踏まえてやさしく具体的な手順を示す。好評の前著『基礎学力をつける英語の授業』の続編。

#### 目次

- 第1章 英語教育の未来像を描こうではないか
- 第2章 生徒が自己表現に使う語彙をどう増やすか  
— Caption Methodのすすめ —
- 第3章 自己表現力をつけるためには、どういうことをさせたらよいか  
— 日本人学習者の質問作成能力について検討する —
- 第4章 自己表現力をつける
- 第5章 Discussion 初級編
- 第6章 Imitation Method
- 第7章 ペーパーを読み上げないでスピーチ活動をさせるには  
→ Read and Look up方式
- 第8章 対話：英語教師の「授業力」を育てよう



ELEC 同友会英語教育学会 実践研究部会 編著

### 中学校・高校 英語 段階的スピーキング活動 42

2,415円(税込) B5判 208頁 ISBN 978-4-385-36355-4

「インタビュー活動」「スピーチ」「チャット」「レポーティング」「ディベート」など、スピーキング活動についての指導技術や42の事例を紹介。中学校から高校までを見据えた計画のもと、既習の知識を活用して「話す」力を育む授業ができる。

#### 目次 (一部抜粋)

##### 第1部 技術・理論編

- ・ペア、グループ編成
- ・スピーチにおける話し手への指導
- ・スピーチにおける聞き手への指導
- ・スピーチの原稿指導
- ・レポーティングの指導
- ・指導したい会話技術一覧
- ・ディベート
- ・ディスカッション
- ・視聴覚機器の活用

##### 第2部 指導編

- ・自己紹介をしよう
- ・1文加えて答えよう
- ・私の好きな有名人
- ・はじめてのチャット
- ・身近な人を紹介しよう
- ・ある日の出来事
- ・夏休みの思い出
- ・意見を述べよう
- ・理由を述べよう
- ・目的を述べよう
- ・10年後の私
- ・My Treasure
- ・Survey & Report
- ・30秒コマーシャル
- ・Speeches & Comments
- ・My Dream
- ・Balloon Debate
- ・My Opinion …他



# 三省堂

<http://www.sanseido.co.jp/>

本社 〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14 TEL. 03 (3230) 9411 (編集案内)・9551 (営業)  
TEL. 03 (3230) 9422 (英語教科書編集部)

大阪支社 〒530-0002 大阪市北区曾根崎新地 2-5-3 TEL. 06 (6341) 2177

名古屋支社 〒460-0008 名古屋市中区栄 3-25-43 瑞穂ビル 4F TEL. 052 (252) 9211・9212

九州支社 〒810-0012 福岡市中央区白金 1-3-1 TEL. 092 (531) 1531・1532

札幌営業所 〒060-0042 札幌市中央区大通西 15-2-1 ラスコム 15ビル 2F TEL. 011 (616) 8722